



<b>Data</b>	2022-22
監督・脚本:	ベタシュ・サナイハノ
	マリヤム・モガッダム
出演:	マリヤム・モガッダム/アリ
	レザ・サニファル/ブーリ
	ア・ラヒミサム/アーヴィン
	ブルラウフィ/ファリド
	ゴバディ/リリ・ファル
	ハドプール

## 👁️👁️ みどころ

イラクは中国に次いで死刑執行数の多い国。死刑廃止論の最大の論拠は“誤審”の可能性だが、本作冒頭、まさにその現実が！

「汝の敵を愛せよ」のキリスト教と違い、イスラム教は「目には目を、歯には歯を」。すると、夫の処刑1年後に賠償金を支払うからゴメン！そんな連絡を受けた妻のとるべき対応は？

思わせぶりのタイトルはコーランの「雌牛の章」の一節だが、その意味は？未亡人の前に現れ、物語を主導していく謎の中年男の親切はなぜ？この男の正体は？観客にはそれがすぐに明かされるが、それを知らない未亡人は？

ストーリーの展開は興味深いが、いくら何でもこりややりすぎ？あっと驚く結末は日本人の想像をはるかに超えるものだが、その賛否は？

—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————

### ■□■タイトルの意味は？■□■

イラン映画の本作は、第71回ベルリン国際映画祭で金熊賞と観客賞にノミネートされ、批評家からはイランの名匠であるアスガー・ファルハディの傑作に並ぶと高く評価された。しかし、本国では3回上映されただけで、上映禁止に。それは一体なぜ？

本作冒頭は『白い牛のバラッド』というタイトルにピッタリの白い牛が登場し、そこに「モーセは彼(か)の民に言った“神は牛を犠牲にせよと命じられた”民は答えた“私たちを嘲るのですか？”」の字幕が表示される。これはコーラン 雌牛の章(アル=バカラ)の言葉らしい。旧約聖書に書かれているモーゼの“出エジプト記”の話は『十戒』(56年)等で有名だが、コーランに疎く、「目には目を、歯には歯を」くらいしか知らない私はこの教えを理解することができなかつた。さて、あなたは？

### ■□■物語は死刑の執行から！しかるに真犯人発見！■□■

私は弁護士だから、①死刑制度には賛否両論があること、②日本は死刑容認国だが、今や廃止国の方が多くなっていること、③アメリカは存置州と廃止州に分かれていること、④死刑執行数世界一の国は中国であること、等を知っていたが、イランが死刑執行数世界2位の国であることは知らなかった。

冒頭に続くのは、妻のミナ（マリヤム・モガッダム）が駆けつける中、夫のババクの死刑執行が行われるシークエンス。ババクの姿は登場せず、その罪状等も明示されないが、それから1年後、裁判所からミナに対して驚くべき報告が。それは、ババクが告訴された殺人事件を改めて精査した結果、事件に関わった別の人物が真犯人だと確定した、というものだが、そんなバカな！！そういうことが起こり得るから「死刑は廃止すべき」の議論が有力になるわけだ。いくら「国から賠償金が支払われる」と言われても納得できないのが、ミナ。聴覚障害で口がきけない7歳の娘ビタ（アーヴィン・プールラウフィ）を育てながらテヘランの牛乳工場で働いているミナは、さあそれを聞いてどうするの？

### ■□■最愛の人を冤罪で失ったとき、あなたならどうしますか？■□■

本作でミナ役を演じたのは、ベタシュ・サナイハと共に本作の脚本を書き、共同監督した女性マリヤム・モガッダム。本作では全編を通じてミナの価値観とそれに基づく行動が焦点になるが、賠償金の支給に納得できないミナが単身、裁判所に赴き、有罪判決を下した担当判事であるアミニに対して謝罪を求める姿は、私には不可解。ミナの知的レベルがどの程度かは知らないが、女優マリヤム・モガッダムの顔立ちを見ている限り、決してバカとは思えないから、その思いはなおさらだ。

もっとも、ミナに対して「まだ若いんだから、運命を受け入れて娘を立派に育てなさい。死んだ人は還ってこないんだから」と優しく励ましてくれたアパートの大家の妻から、「すぐに出て行ってもらわなければならなくなった。」と言われると、無条件にそれに従ってしまうミナを見ていると、やはり少しヘン・・・？そこではなぜ、そんな理不尽な要求にすんなり従うの？さらに、ある日突然訪ねてきた夫の古い友人だという中年男性レザ（アリレザ・サニファル）から、借りていた金を返すと言われて納得するストーリーが少しヘンなら、レザが提供してくれたアパートに、ろくな契約書も作らないまま入居するのも少しヘンだ。

本作のテーマが「最愛の人を冤罪で失ったとき、あなたならどうしますか」であることは、導入部ですぐにわかるのだが、中盤のそんなストーリー展開を見ていると、私には脚本に少し難点があるのでは？と思えてくる。思春期に近づいているビタが「学校に行きたくない！」と駄々をこねる現状もある意味当然だが、ビタはなぜか突然登場してきたレザに懐いていくからアレレ・・・？これも少しヘンなのでは？

### ■□■未亡人を取り巻く人間模様は？■□■

ミナは冤罪で夫を死刑にされたうえ、1年後に「それは間違いだった」と弁明されるという、何とも不幸な立場の女。そのうえ、7歳の娘ビタが聴覚障害になってしまうという

不幸まで背負っていたし、ビタの親権、養育を巡っては義父と対立していた。そして、義弟（プーリア・ラヒミサム）はそんな義父の言い分を伝えるべく、ミナの周りにまわりついていた。裁判所からの「真犯人が発見された」との報告は、ミナにとって迷惑な話だったが、そのために巨額の賠償金が払われるという話は、義父と義弟にとってはラッキーなビッグニュース。それなら、なおさらビタの親権を取り戻さなければ、と義父は裁判手続に訴えるハラを固めたい。

他方、レザと不仲だったレザの息子は、ずっと家庭を顧みなかった父親を痛烈に批判し、兵役に行くと言い残して家を出て行ったから、レザもかなり孤独な生活を送っていたらしい。したがって、レザにとってミナとビタへの親切は単なる思いつきではなく、自分の心の安らぎにもなっていたわけだ。とりわけ、映画好きのビタと映画を一緒に観たり、パバクの墓参りやピクニックを共にしたりすると、レザとミナ、ビタ間の距離が急速に縮まっていったのは当然だ。そのため、兵役に行った息子の計報を受けたレザが倒れこんだ時、ミナはレザを病院に連れて行ったり、医師から看護が不可欠だと言われた後は、自宅に連れ戻って看護したり……。しかし、そんな3人の“共同生活”が続くのは不自然。だって、この3人は家族ではないのだから……。しかも、ある夜、スクリーン上で展開された事態にはビックリ。ミナは久しくしていなかった口紅をなぜ今、唇に塗っているの？

### ■□■この男は誰？そして何者？なぜこんな親切を？■□■

本作のテーマは、「最愛の人を冤罪で失ったとき、あなたならどうしますか」だが、本作中盤から登場する、えらくミナに親切な男は一体誰？そして何者？それは観客にはすぐに明らかにされるが、ミナに対しては、最後まで「夫ハバクの古い友人」というだけで、その正体が最後まで明かされないところが本作のミソ。そのため、ある意味で本作のテーマは、ハバクに対して誤って死刑判決を下してしまった担当判事のレザに対して「あなたはいかに未亡人ミナに対して償いますか？」を問う映画になる。なるほど、なるほど。

本作はそんなテーマに沿って、レザのミナに対する償いの物語が展開していくものだと考えれば、本作を容易に理解できる。しかし、本当にそれでいいの？またそうだとすると、レザのミナに対する償い方はこれでいいの？私には全然納得できない。

私はそんな思いでずっと本作の中盤から後半を観ていたが、その後に展開していく本作のあっと驚く結末にビックリ！

### ■□■真相は誰の口から？あっと驚く結末にビックリ！■□■

ビタの親権をめぐる裁判で義父が敗訴し、ミナが勝訴したのは喜ばしい限り。それに喜んだミナが、「今夜はみんなで食事しましょう」と提案したのも頷ける。しかし、レザが車を離れた時に、義弟からミナにかかってきた電話で伝えられたある情報とは？日本の弁護士である私は日本の裁判制度の公正さを信じているが、イランはどうもそうではないらしい。すると、ひょっとしてビタの親権をめぐる裁判でミナが勝訴できたのは、レザが元の同僚たちに手を回してくれたお陰……？さらに「お前が寝た男は、お前の亭主を死刑に

した、隣に座っている男だぞ！」との義弟からの情報はあまりにあまり・・・。

しかして、その日の夕食会は・・・？コーランには「目には目を、歯に歯を」の教えがあることを知っている私は曲がりなりにも本作の結末に納得できたが、ストーリーとしては何ともはや・・・？問題提起作であることは認めるものの、あまり後味のいいものではなかったことは確かだ。

2022（令和4）年3月7日記